

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に



CREATOR INTERVIEW ^{No} 148

鴻池朋子 Tomoko Konoike

絵画、彫刻、パフォーマンスなど様々なメディアと、旅によるサイトスペシフィックな表現で芸術の根源的な問い直しを続けている。近年の個展：2009年「インタートラベラー 神話と遊ぶ人」東京オペラシティアートギャラリー、鹿児島県霧島アートの森美術館、2016年「根源的暴力」神奈川県民ホール、群馬県立近代美術館/芸術選奨文部科学大臣賞、2018年「Fur Story」Leeds Arts University、「ハンターギャザラー」秋田県立近代美術館、2020年「ちゅうがえり」アーティゾン美術館/毎日芸術賞受賞、2022年「みる誕生」高松市美術館、静岡県立美術館など。グループ展：2016年「Temporal Turn」スパンサー美術館・カンザス大学自然史博物館、2017年「Japan-Spirits of Nature」ノルディックアクバラル美術館、2018年「ECHOES FROM THE PAST」シンカ美術館、2022年「Story-makers」シドニー日本文化センターなど。著書に『どうぶつのことば』絵本(羽鳥書店)など。

栗林隆 Takashi Kuribayashi

武蔵野美術大学を卒業後、ドイツに滞在。2002年デュッセルドルフ・クンストアカデミーをマイスターシューラーとして修了する。東西に分かれていた歴史をもつドイツ滞在の影響もあり、「境界」をテーマに様々なメディアを使いながら制作を続けている。シンガポール国立博物館(2007)、チェルシー・カレッジ・オブ・アート・アンド・デザイン(2013)での個展をはじめ、シンガポール・ビエンナーレ(2006)など国際展への参加も多い。国内でも十和田市現代美術館に《ザンプランド》(2006)が恒久設置されている他、「ネイチャー・センス展」(森美術館、2010)などのグループ展にも数多く参加している。



今ここにある「根源的なもの」を身体で感じる。



クリエイターインタビュー

『作品や作家と自分の個人的なつながりを見出し、違いを尊重できる意識づくりを』

published_2023.06.28 / photo_yoshikuni nakagawa / text_ikuko hyodo

芸術の本来のあり様を探求し続ける鴻池朋子さん、「境界」をテーマに壮大なインスタレーションを制作し、2022年度『ドクメンタ 15』に参加した栗林隆さん。おふたりは、2023年5月に開催された『六本木アートナイト 2023』にて、メインプログラム・アーティストを務めました。既存のアートシーンや美術館という枠組みに、より自由な発想で向き合うおふたりの対話から今回浮かび上がったのは、アート作品を「見ること」や「つくること」の手前にある生き方そのものについて捉え直すような問いかけでした。コロナ禍を経て、あらためて立ち返るべき「根源的なもの」とは、どのようなものなのでしょうか。

なぜ日本で展示をすると「我慢」や「妥協」になってしまうのか。

栗林隆 そもそも僕の作品はタブーを扱っていることが多いし、なかなか手を出しづらい作家だろうと思います。にもかかわらず、4年ぶりのオールナイト開催となる『六本木アートナイト 2023』でオファーが来たことに面白さを感じました。大前提として、僕なんかは展覧会のために制作しているわけではなく、生き方というか、自分と社会との関係性の中でもものをつくっています。だからこそ、枠組みがあって制約が多いイベント自体とは相いれない部分があるんですね。海外であれば、アーティストのやりたいことを形にするために、運営側もチャレンジしてくれることが多いのですが、日本では制約が優先されがちで、どうしても我慢とか妥協の方向に行きがち。最終的に「やっぱりやらなければよかった」という気持ちになることもあるんですよ。別にケンカしたり、戦かったりしたいわけではないのですが、どこか難しさを感じてしまうのも事実です。今回は、主催者側が覚悟を決めて一緒にチャレンジしよう、ということだと思い、やってみよう、という気持ちでお引き受けしました。

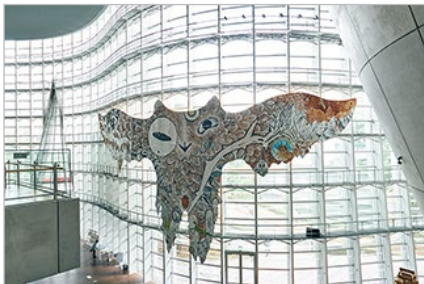


六本木アートナイト2023

2023年は5月27日(土)、28日(日)の2日間にわたって開催。「都市のいきもの図鑑」をテーマに、六本木の街で、人間だけでなく、動物や昆虫、植物などさまざまな生き物がいかに命を育み、どのような生態系で共生しているのかを、アート作品やパフォーマンス作品を通して考えられるようなプログラムに。

https://6mirai.tokyo-midtown.com/event/artnight_2023/

鴻池朋子 今日は、根源的な話をする会なんですね(笑)。たしかにコロナ禍の3年間を経て、原点に立ち戻るときなのかもしれないと、栗林さんの話を聞いていて思いました。私は『六本木アートナイト』のコンセプト、つまり一晩だけ開催して次の日には撤去してしまうと聞いたとき、「それじゃあ、うちの職人は動かないですよ」と伝えたんです。ぱっとつくって賑やかして終わるような、形骸化したお祭り騒ぎにとでも違和感を抱いたんですね。観客の身体はすでにコロナを経て変容しているのに、企画側が気づいていない。それで会議の場で、「このボリュームだったら少なくとも2カ月は展示するのに、1日ってさすがにないよね!？」と言って、緊張を走らせてしまったんです。「ああ、やっちゃったな」と思いつつ、一人ひとりが持ち帰って何かしら感じてくれるだろうと期待もして。そうしたら国立新美術館のエントランスロビーに、『武蔵野皮トンビ』を会期より3週間ほど早く展示できることになったんです。この美術館の決断はすごいことです。美術館や実行委員会って、大抵ガチガチで融通が利かないことが多いのですが、今回は国立新美術館の展示室の外のアトリウムという境界的な場を設置場所として選んだこともあり、スケジュールが可能になった。その対応は、一歩前進だと思いました。



武蔵野皮トンビ

国立新美術館のエントランスロビーに展示された鴻池さんの作品。先史時代より人間は、動物を狩って食用にし、皮を被服としてまとい、神様への捧げものとしてきた。この作品は、資本主義の下では商品化されない切れ端として捨てられる運命であった皮を用いている。トンビの身体にはさまざまな生き物や景色、現象が描かれており、大きく羽ばたく姿は、人間と動物／自然の関係を思い起こさせてくれる。

角川文化振興財団所蔵

©2021 Tomoko Konoike Courtesy of Kadokawa Culture Museum

鴻池朋子 アーティスト

TOMOKO KONOIKE / Artist

栗林隆 美術家

TAKASHI KURIBAYASHI / Artist



published_2023.06.28 / photo_yoshikuni nakagawa / text_ikuko hyodo

スタート地点にあるべきなのは、"How To"ではなく魂。

栗林 1日のために3カ月程度かけて準備をするのは大変ですが、関わる人の熱意を感じたら僕らだって頑張れる。一方、「何日の何時までに搬入して、何時までに撤去してください」とルールや事務的なコミュニケーションばかりになってしまうと、イベント業者じゃないのになあと辟易してしまうんです。些細なやり取りかもしれませんが、アートに関わる人の心意気を関係者全員で変えていく潮時にきているのではないかと思います。"How To"に終始するのではなく、本来はスタート地点に"魂"があるべきだと思うのです。

若い子たちが、「どうやったら有名になれるんですか?」「どうやったらお金を稼げるんですか?」と、すぐに答えを求めたがるのもその弊害。世の中が先のことばかりを見せようとするから、今この瞬間、自分がやるべきことに集中できていない。経済偏重で、未来のためにこうするべきと声高に言われる時代ですが、今を集中して楽しむことが未来につながっていくのが、あるべき流れでしょう。未来から入ってしまうと、不安や恐怖が先立って、今に集中できなくなるんです。

僕はよく「行き当たりばちし」と言っているのですが、何も考えないで生きるのが本来の生き物の姿。動物的感覚を失ってしまうと、頭ばかりを使うようになるんですよね。感覚的にピンときたものを実行できるのがアーティストであって、僕らの制作は春夏秋冬の流れに沿って存在するもの。そのあたりをもう少し理解してほしいし、難しいのは承知の上で、現状を変えていかなければいけないという人がひとりでも出てきてほしいですね。

アーティストの「わがまま」と捉えられてしまう日本。

栗林 鴻池さんは日本でも「そんなこと関係ねえ」ってガンガンやっちゃってるはず（笑）。それくらい素敵な作家さんってことなんですけど。僕の作品の場合は、単体で成立するというより、空間の特性を生かした作品が多いので、実現できるかどうかのせめぎ合いがどうしても多くなるんです。そのとき「できない」と言うのは簡単で、どんなことでも「やってみよう」とトライすることがとても大事。しかし、日本だとなぜか作家の「わがまま」と捉えられてしまうことが多い。例えば、《元気炉》というスチームサウナの作品は薪（まき）を使っているのですが、火を使えば煙も出るし、においもするのは当然です。チャレンジしたいということであれば、まず解決できる方法を探る必要がありますよね。



元気炉

原子炉を模したスチームサウナで、タイ式の薬草スチームサウナが好きな栗林さんが、20年以上前から構想していた作品。東日本大震災以降、原発事故を題材にした作品を制作し続けてきたが、ネガティブに捉えていた原発事故をポジティブに転換させた作品でもある。2020年、下山芸術の森 発電所美術館で開催された個展にて1号機を発表。以降、機数を増やしている。

昨年参加した『ドクメンタ 15』はその点、「燃えたら消せばいいじゃないか」って、当たり前のことが当たり前に通じるし、より重要なことを優先して考えてくれました。日本では、作品に触ったら壊れてしまうという理由で、できないことばかりが増えてしまうけれども、壊れたら直せばいいだけの話だし、極端な話、やけどしたり、ケガしたりしながら関わっていけるくらいが理想というか。僕が普段インドネシアに住んでいるから、そう思うのかもしれませんが。そういう意味でも鴻池さんと僕が『六本木アートナイト』のゲストというのは、すごく面白いし、チャレンジングだと思います。僕も僕だけど、鴻池さんも鴻池さんだしなって（笑）。



ドクメンタ

ドイツ・カッセルで1955年以来、5年に1度開催される現代美術の大型国際展。最古の国際展である『ヴェネチア・ビエンナーレ』に匹敵する重要な展覧会のひとつとみなされている。栗林さんは2022年に開催された『ドクメンタ15』で、日本から唯一招聘されたアーティスト。《蚊帳の外》栗林隆+Cinema Caravan、ドクメンタ15（ドイツ・カッセル）、カールスアウエ
photo Takashi Kuribayashi

鴻池 栗林さんの話を聞きながら、ふと超地味なことを思い出したのですが、今回、作品の搬出のために4 tトラック3台を使うと運送業者から見積もりが出てきました。予算はもう決まっていたので3台でも2台でも関係はなかったのですが、きっと2台でいけるだろうと、私は自分で作品のトラック積み込み図面を手書きで起こし、業者さんを説得して2台に削りました。そんなに頑張った自分がおかしくて（笑）。でも私も含めて、みんながこういう地味なことの積み重ねをやればいいんですよね。なんていうか、作品というのはその派手な形にあるのではなく、栗林さんが話しているのはすごく当たり前のことだと思う。

栗林 特別な話ではまったくないですね。

未来について考えることを一旦止めて、足元を見よう。

鴻池 私は未来について考えることを一旦止めて、足元を見た方がいいと思うんです。遠くの山へ行かなくても、六本木でも自然は見つけられます。風のおいや、今の季節だったら緑のおいが濃くなってくることを幸せだなと思うだけでもいいんです。大切なのは、それらを感じられる身体があるかどうか。主催者側が何か目新しいものを与えるというのではなく、観客側が主体となって作品を能動的に感じ、感覚を開いていく時代になっていると思います。遠く広くをオブザーブするような、視覚優先の考え方で物事を進めるよりも、まずは自身の手元や足元にある土や雑草を感じながら、自分の身体スケールでそれぞれの仕事を粛々と楽しんでいける方がいい。

栗林さんがおっしゃるように、燃えてしまったら急いで消せばいいし、やり過ぎちゃったら誰かが止めればいい。「ここは危ないですよ」「このやり方は失敗するからダメですよ」と先回りする母性のように、人間の本来持っているセンサーをつぶしているのが今の美術館なんです。本能的な欲求なのかもしれませんが、美術館で仕事をするたびに自分が次第に弱くなっていくようで、それよりも外に自分をさらしていきたいようになってしまっているんですね。

栗林 せっかく《元気炉》のように自由なものができるのに、美術館で展示をするとさまざまな規制が入って、本来できていたこともできなくなる。これって何か意味があるのかなと思います。コロナ禍を経ているが、みなさんも同じような違和感を抱くことになっていたのではないのでしょうか。



鴻池朋子 アーティスト

TOMOKO KONOIKE / Artist



栗林隆 美術家

TAKASHI KURIBAYASHI / Artist

published_2023.06.28 / photo_yoshikuni nakagawa / text_ikuko hyodo

大事なのは共感ではなく、自分で感じて尊重すること。

栗林 変な言い方ですが、僕は、他人はどうでもいいと思っているところがあって。他人が嫌いとか、自分が好きとかではなく、まずは自分に集中して自分自身のエネルギーがチャージされている状態じゃないと、人から逆に奪っちゃうと思うんです。

鴻池 たしかに、他者に依存してしまいますね。

栗林 自分が満たされていると、相手に与えられるじゃないですか。だからイライラしているときは、海に行ったり波乗りをしたり、好きなことをするんですが、そうやって自分の状態を把握してコントロールしようとするときには、人とあまり関わらない方がいいんです。だけど今の世の中は、何かと関わらせようとするところがありますよね。無理やり関わるのが一番問題で、干渉はしないけど尊重して、それぞれが個性を發揮して好きなことをやっている、いい循環が生まれる。みんなが言いたいことを言って、それに対して「いや、それはおかしい」ではなく、「君はそうなんだね。僕は違うけどこうだよ」と言い合える。それが個々のアーティストのあり方だし、個性だと思うんです。

最近、アイヌの人たちと交流を持っていますが、あまり他者には干渉しない文化があります。例えば、ものをつくることは神様に対するお礼であって、人に見せるためという発想ではないんです。それを聞いたとき、とても面白いと思ったし、アーティストとして自分自身も改めなければいけない部分だと思いました。

鴻池 同じ枠組みの中にいると、つい同じ型を使うことばかりしてしまう。新しいアーティストやデザイナーを呼んできて、見た目を変えたらその場のぎにはなるけれど、型は同じでカスタマイズやバージョンアップをしているだけで、停滞したままになりがちですよ。できあがりがつたなくても、未熟でかっこ悪くてもいいから、自分の小さなやるべきことを1個でもやらない限り、根本的なところは何も変わらない。美術館も、行けば作品と呼ばれるものに出会えて、非日常的な体験が与えられるという、「何となく素敵」で終わるパターンに陥ってしまう。その地場が強いのでどんどんそれらしくなるというか、美術館に置くだけで美術品になっていくような恐ろしさがあるんですよ。

そんな中で私は、見る人たち、鑑賞者、知覚者の可能性に賭けています。つくる側ではなくその人がどう感じるか。嫌なもの、興味のないものでも、自分で見て、知って、尊重できることが大事。誰かと共感なんてずっと後でいいんです。個人であればちゃんとわかっているのに、組織になると途端にパターンや形式に引きずられてしまうんです。ですからまずはたったひとりで感じてみる。

栗林 美術の文脈はもちろん大事だし、研究や評論をする人がいるのも大事ですが、それがすべてではない。要するに、僕の作品を評論してくれる人は、どうにかして文脈に入れようとするんだけど、そもそも無理があるんですよ。現代美術と呼ばれるものが登場してからこれだけ長い時間が流れて、いろんなマーケットやアートシーンがでてくると、ある種見方が固まってしまうのは避けられないし、新しいものを探そうとしても、もはや全然新しくない。だから文脈や周りのことは気にせず、それぞれがもっと個人的なところで関わっていけばいいと思うんです。僕自身は、新しい文脈をつくっているつもりはないけれど、子どもたちと同じくらい自由なつもりです。

鴻池 そして仮に失敗しても、誰かひとりに始末書を書かせるのではなく、関わった全員が失敗のメカニズムを考え、当事者としてどうすべきかを考える。それも例えば行政や美術館のビル管理のために考えるのではなくて、生身のひとりの人としての作家を基準に考えるべき。今はそれが全然できていないのではないのでしょうか。



鴻池 朋子 アーティスト

TOMOKO KONOIKE / Artist



栗林 隆 美術家

TAKASHI KURIBAYASHI / Artist

published_2023.06.28 / photo_yoshikuni nakagawa / text_ikuko hyodo

自分をコントロールしているようで、一番できていないのが人間。

栗林 《元気炉》のような場所は、昔はいっぱいあったんです。サウナとか銭湯とかが、地域コミュニティの場でしたよね。だけど生活スタイルの西洋化によってそうした施設が減り、人間の体温自体も下がってしまっている。しかもマスクなどで菌も排除して、身体の免疫力が弱ってきています。《元気炉》はコロナ禍のときにできたのですが、アートを利用して強制的に健康になっていこうぜって思ったんです。これを「サウナ」と呼んでしまうと、保健所の基準などでややこしくなるけど、アート体験ということにしてしまえば、そのあたりも曖昧になる。今はみんなが不安になったり、不健康になったり、楽しくない状況が生まれがちだけど、《元気炉》的なものが街中にぼこぼこできれば、もっと活気が生まれるはず。アートをやる意味というのは、そういうところにあるんじゃないかな。だから『六本木アートナイト』のテーマとして「都市のいきもの図鑑」が掲げられていますが、どちらかというと「いきもの人間図鑑」だなと僕は思っていて。「いきもの」というと、植物とか動物とか昆虫を連想しがちですが、不思議なのは人間の方なんですよ。

鴻池 たしかに、自分をコントロールしているように見えて、できていないのが人間ですよ。動物性を備えているというのは、いつ破綻するかわからないってことでもあるから。そのことに気づかないで平穏に生活しているけど、あるきっかけで人は突然暴走しちゃうこともあるわけですよ。環境が一変すれば人間はころころ変わるものなんですよ。

二次情報からは得られない、自分だけの実感。

栗林 僕が好きなインドネシアの街ジョグジャカルタでは、道路が混みあってもクラクションを鳴らす人がほとんどいないんです。たまに車で逆走してる人もいるんだけど、特に誰も文句を言わなくて、「あいつには逆走する理由があるんだろう」って空気があるんです。例えば15メートル逆走すれば曲がれるのに、ぐるっと回らなければいけないときってあるじゃないですか。そういうシチュエーションで何が起こるかっていうと、そこだけは逆走をする循環が生まれるんです。基本的には信号も守るし、逆走もしちゃいけないんだけど、そこはしてもいいよねっていう、柔らかさがある街なんですよ。

鴻池 すごくいいですね。

栗林 そっちの方が、本来あるべき姿ですよ。誰もいないのに信号が赤だからずっと待っているなんてこともありえない。誰も信用していない分、信号が青のときでも安心して渡るのはなく、注意をする。そうするとかえって事故が起きないんです。信用しないことが自由を生んで、逆に信用していることになるというか。日本の都市もそういう柔らかさを持つと、楽しくなるのと思いますよね。

鴻池 今はみんなが目、視覚からの情報を渴望して、常に情報を浴び続けている一方、それらが血肉になっていない感じがありますよね。時間はかかるかもしれないけど、目ではなくとにかく手足を使うべきだと思います。いいと言われている作品でも、実際にそこまで行ってみて意外とつまらないというのを自分で確かめに行く。他人はこう感じたかもしれないけど、私は実はこうだったと発見する。違いがあるのがいいことで、整理されたデータで受け取った二次情報から、身体の奥底からの気づきは得られないんですよ。もし途中でトラブルに巻き込まれたとしても、それも含めて自分の身体で感じ取って、時間をかけて言語化していけばいいんです。その場でうまく表現できなくても、10年後にこういうことだったと言えればいい。そのときの感覚を持ち続けていることが重要なんです。遠くの方まで見ようとせず、足元の触れられるものから手応えを感じていくことが大事だと思うし、私も栗林さんもそういうものをつくっていますよね。

栗林 まったくその通りです。僕が《元気炉》でただのサウナではなく、スチームサウナにこだわっているのも、蒸気で周囲が見えなくなるからなんです。

鴻池 ああ、なるほど！

栗林 目から入る情報は、脳に直結して頭をすごく使うんだけど、目がシャットダウンされると心にシフトするとか、音やにおいなど違う感覚が研ぎ澄まされて、リラックスできるんです。みんな感覚的にわかっていると思うのですが、人間って脳で動いているようでいて、実は心で動いていることが多い。「頭にくる」という言葉の通り、怒っているときって心は意外とシーンとしていて、頭でしか怒っていないんですよ。ところが「悲しい」とか「嬉しい」は、頭じゃなくて心が動いている。だから、頭で嬉しいと思ってるのかな、いや違うな、と頭からくる感情なのか、それとも心からくる感情なのかを認識できるようになると、非常に素直に生きることができると思います。鴻池さんが話したように、目に頼らないで作品を触ったり体験したりするっていうのも、すごくいい。普通のサウナだとみんなじっとして会話をしないんですけど、スチームサウナだとお互いが見えないから、リラックスして会話が弾みます。それで外に出たら知り合いだったみたいなの、面白いことがよく起こるんです。

作家と作品をより深く感じるための方法。

鴻池 今回、『六本木アートナイト』で私たちに依頼してくれた方のチョイスは間違っていないと思うのですが、呼ぶからにはもっと作品を主催者側が知ってほしい気持ちもありますね。

栗林 僕らは本当はもっと面白いんですよ！ ってことですよ。その面白さを十分に発揮させてもらえないのが、ちょっと悔しいというか。自画自賛してもしようがないんだけど、これではもったいないな、と思うことも多いです。

鴻池 私たちは別に美術だけを目標しているわけじゃないし、展示もあくまで生きていく中のタイミングのひとつでしかないわけで……。

栗林 一部とか、一瞬ですよ。

鴻池 そう、展覧会は途中下車みたいな感覚です。だけど二度と会わないかもしれない人たちがせっかく集まったからには、面白くやりたいし、真剣にやりたい。そのためには施設のオーナーや組織など、関わるすべての人の意識が少しずつ変わっていくことが、やはり不可欠だと思うんです。なので、作家を知るという意味では、作品の設置と一緒にやるといいかもしれないですね。現場では使い物にならなくてずっと怒られっぱなしで、何をすればいいのかわからなくてウロウロしているだけかもしれないけれど、それでもいいんです。人の仕事を見ると、思いがけないところで神経を使っていることがわかるから。

栗林 こうやってつくってるんだって意外に思うことが多いかもしれませんね。

鴻池 パッと見は嫌いだったり、興味がなかったりした作品でも、関わってみると意外な側面があると実感できますよね。私は美術館に展示される作品がほとんどつまらなく見えてしまっていたのですが、他の展示作業を手伝ったり、作家の話を聞いてみると驚くことが多くて、人によって大事にしているものがまったく違うことを知りました。違いを理解することで、ようやく相手を尊重もできます。つまらないとバツサリ排除することはいくらでも可能なのですが、一見してくだらないものやつまらないものにも、人間が本来持っている不思議なセンサーを経由して関わっていけることが、アートの面白さなのかもしれないですね。

撮影場所：『六本木アートナイト 2023』（会期：2023年5月27日～5月28日）期間中の国立新美術館および六本木ヒルズアリーナ

取材を終えて……

アートナイトの開催前日に行われたこの対談。おふたりの思いが次々と溢れてくるような内容になりました。手厳しいご意見と受け取る人もいるかもしれませんが、おふたりが繰り返すように、今が変わることのできるチャンスなのでしょう。美術に直接的に関わる人も、そうでない人も当事者意識を持って、目の前のこと、足元のことに誠実に向き合うこと。遠い未来ではなく、今に集中することが、明るい未来を創るという言葉が印象的でした。

(text_ikuko hyodo)